The Japan Society of Educational Sociology

縦割りホームルーム制の研究

○苅谷剛彦（東京大学）　冨江英俊（東京大学大学院）
○酒井朗（お茶の水女子大学）　荒川英央（東京大学大学院）
○越智康詞（信州大学）　田中　葉（お茶の水女子大学大学院）
山田千明（筑波大学大学院）

1．問題の提起と方法

はじめに

この報告は、福井県立若狭高校において1949年から1994年までの45年間にわたり実施された「縦割りホームルーム制」(注1)の実践を事例に、（1）教育理念の実践に対する影響、および（2）教育実践の生徒に及ぼす教育効果の2点において、新たな地平を切り開くものである。

複数の学科を併設する若狭高校は、新制高校として発足の1年後から、異学年・異学科の生徒たちから構成される「縦割りホームルーム」を中心に、教育活動を編成してきた。1つのホームルームには、1年から3年までの生徒が、学科ごとの人数も学科の規模に合わせて均等に所属する。そのような「縦割りホームルーム」が、出欠の確認、生徒への情報伝達、ホームルーム活動や学校行事、さらには進路指導など、学校生活の基本単位となっていた。

他方で、通常の授業クラスは、学科別、学年別に編成されている。したがって、クラスとは異なる編成原理をもつ縦割りホームルーム制は、後に詳しく見るように、教師にとっても生徒にとっても、学校生活に二重の構造をもたらすものであった。その意味で、縦割りホーム制は、学校に不安定な要素を持ち込む実践であったということができる。その結果、以下に見るように、若狭高校では教師の間でたびたびホーム制の存廃をめぐる議論が行われた。存廃をめぐってたびたび議論が行われながらも、およそ半世紀にわたり存続し続けた。縦割りホームルーム制とはそのような制度だったのである。

縦割りホームルーム制は、教師たちによってどのように論じられたのか。その語りは、教師たちが学校での実践を意味づける上で、どのように作用したのか。また、生徒たちは、そのようにして維持されたホームでの経験を、卒業後の人生の中でどのようなものして意味づけることになったのか。この報告では、教育理念について語ることが教育実践にどのような影響を及ぼしうるのか、そうして維持された実践が、高校卒業後の生徒の人生に対してどのような意味をもちうるのかを明らかにしようとするものである。

先行研究と本研究の課題

こうした本報告のねらいを明確にするために、ここでは簡単に先行研究との関係に触れておく。私たちが教育をめぐる「語り」に注目する1つのねらいは、近年の教育言説研究に対して、新しい――いくぶん批判的な――視点と分析を提示することにある。教育社会学においては、近年、教育言説をめぐる分析が盛んに行われている（広田,1992、今津・樋田,1997など）。これらの研究は、教育をめぐる言説の相対化を行うことにより、意図的か否かにかかわらず、教育についての一種の価値剥奪（あるいは「脱呪術化」）をもたらしている。教育の理念や理想を語ることは、教育の現実から遊離した言説の産出にすぎないといった立場が、陰に陽に前提とされ、「あるべき教育の理想」が脱呪術化される。その結果、教育の理想や理念を語ることへのシニシズムが進行するのである。

教育理念と実践との遊離・乖離という問題構成は、教育の言説研究にとどまらない。学校の組織研究においても、「ゆるやかな連結」モデル（March,James G.,&Olsen,Jhan P.,1976)や脱連結理論（Meyer&Rowan,1978）など、抽象的な教育理念を教育現実から遊離したものと見る見方が提示されている（耳塚,1992）。

もちろん、このような教育理念の相対化が、「価値まみれ」の教育議論から距離を置き、現実を無視した理想論の空虚さを批判する上で、一定の役割を担ってきたことは認めてよい。しかし、はたしてこうした理念のとらえ方は、教育の現実や実践との関係を十分視野に入れて行われたものだろうか。教育の理想や理念を、その抽象性とい

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

う一側面だけでとらえて、教育実践とのかかわりについての十分な観察ぬきに、言説の世界にとどまって理念の断罪を行い、理想を語ることをシニシズムに陥れたのではないか。

このような疑問をもったとき、教育の理想や理念を語ることが、教育実践を行う教師や、教育を受ける生徒たちに、どのように影響するのかという問題があらためて浮かび上がってくる。本研究が、教育理念についての語りと教育実践との関わりに注目するのも、――シニシズムからの脱却を企図しつつ――この問題をとらえ直すためである。縦割りホームルーム制は、教師たちによってどのように語られたのか。理念や実践について語ることは、教育実践のあり方にどのように影響するのか。これらの問いは、言説研究にとっても、学校組織研究にとっても新しい視点を与えるはずである。

さらに、本研究では、教育の効果が発生するメカニズムを明らかにするために、ホームの経験についての生徒（卒業生）たちの語りにも注目する。教育の効果をとらえることは、教育研究にとって重要な課題である。ところが、通常の教育研究においては、効果や影響の測定は、教科指導の側面に限定される傾向が強く、ホームルームといういわば生活指導領域での教育に目が向けられることは少なかった。これは生活指導が「人間形成」までを含む領域であり、教育の影響や成果の測定が難しいためでもある。また、教育の成果は教育を受けているその時点で問われることが普通であり、そこで経験したことがその後の人生の中でどのような意味をもつのかを解明する作業も未着手のままである。しかし、当然のことであるが、年少者への教育はその者が大人になった時点で効果的であることが重要である。

そこで、本研究では、卒業生に対するインタビューをもとに、理念を語ることで維持されてきた縦割りホームルーム制という実践の中での彼らの経験が、卒業後の人生の中でどのような意味をもったのかを明らかにする。このことを通じて、教育の効果がどのように生まれる（再生する）のか、そのしくみの解明をめざす。

方法

「語り」を主たる分析対象とするために、本研究では、教師対象、および卒業生対象のインタビュー調査のデータを分析する[注2]。現職・退職教員対象のインタビュー調査は、若狭高校において、1996年8月に実施された（インタビュー対象者の属性などの情報については、教師、卒業生とも当日の配布資料を参照）。

また、卒業生対象のインタビューの実施にあたっては、できるだけ、卒業年を広くとり、学科や男女の違いなどに偏りがないよう対象者の推薦を若狭高校に依頼した。その際、高校時代のホーム制へのかかわりや活動経験についても、なるべく偏りのないことを念頭においていただいた。卒業生対象の聴き取りは、小浜市（若狭高校内および、対象者の自宅または勤務先）と東京地区（対象者の自宅または大学）、名古屋地区（対象者の在籍する大学）で行った。実施期間は、小浜市の調査が1996年8月、東京地区、名古屋地区が1996年9月である。なお、インタビューにあたっては、あらかじめ用意した質問項目を中心に、回答者には自由にお答えいただき、それをテープレコーダーに録音した。今回用いる主なデータは、それらの録音を文章化したものである。（苅谷剛彦）

2．教師の語りを通してみたホーム制

問題関心―理念と実践（現実）は別物か―

本節では、教師へのインタビューや残された学内資料に基づいて、ホームルーム制を取る若狭高校での実践や経験の特徴について考察する。その際、注目するのは、教育理念や実践の意義について「語る」ことや、ホーム制という組織形態の特徴がこの高校で行われてきた実践・経験にどのような影響を与えているのか、についてである。ここでは、（1）ホーム制という制度は、形式として不安定・未完成であるが、そうであるがゆえに、理念・目標は実践のなかで絶えず参照され、そうすることで再び理念そのものの反省をも促してきたこと、（2）こうした創造的かつ開かれた運動を阻害するものとして、ある特殊な現実理解の枠組み（理想と現実を二分するなど）があったことなどについて述べる。

調査結果

まず、若狭高校の教師たちの語りの中から、この高校での実践＝経験の特徴を検討しておこう。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

この高校の教師たちはほぼ例外なく「異質に対する理解と寛容」というホーム制の理念を高く評価している。また、彼らはホーム制には、クラス制をとる普通の高校では得られぬさまざまな経験や教育的意義があったと振り返り、その内容について熱心に語ってくれた。もちろん、教師たちはホーム制における問題点やデメリットも自覚しており、特に、廃止を直前とする時期においては、こうした問題点やデメリットのほうが大きかったと見る教師も少なくない。だからこそホーム制は廃止されたのである。

だが、ここでは教師の語るメリットとデメリットの内容を比較し、どちらがより重要かについて判定することを目的とするわけではない。ここで確認しておきたいのは、次の単純な事実である。すなわち、存続を主張するにせよ廃止を主張するにせよ、教師たちは例外なくホーム制について一定の共通了解を保持し、同時に、自分なりの独自の考えを持っているという点である。

教師や生徒などこの高校全体がホーム制に深い関与をもっていたことを示す事例は、この高校に遺されたさまざまな資料のなかにも見ることができる。たとえば、ホーム活動のひとつである行事の中に、ホーム活動について討議する活動がさかんに行われてきたこと。また、この高校では「ホームについて、ホームに携わる者に向けて」書かれた資料・出版物がきわめて多く遺されていることなどである。これほどまでに自己について、自己に対して言説を生産する（自己言及の機会の多い）活動＝形式、しかもそれが一部の中心人物ではなく、参加者全員に開かれている学校は日本ではさほど多くはないのではないか。

特に、わたしが注目したいのは教師たちの次のような語りである。「AD会議は会議として面白かった。学校全体のやり方にたいしていろんな先生がいろんな意見を言う」「高校教育とは何のためにあるのか、というような切り込みは常にホーム制の是非論を巡ってあった」。

*

では、こうした特殊な実践＝経験は、この高校においていかにして可能となったのだろうか。こうした問いに答えるには、ホーム制を単なる「異質な者の集められた生徒集団」とする理解、つまりひとつの教育手段として見ることを越えて、学校活動（教育実践）全体に有機的に組み込まれた「仕掛け」、あるいは全体を巻き込んだ「プロセス」として見る視点が必要である。

通常、「ホーム」が「クラス」と比較される場合、「同質」集団に対する「異質混合」集団として特徴づけられる。だが、そこには他にもさまざまな違いがある。特に、「クラス」は授業のためという明確な存在理由をもつ「自明な」集団であるが、「ホーム」はそれ自体を目的とする（つまり、それ以外の存在理由を持たない）「人為的＝非自明な」集団である、という違い点は重要である。なぜなら、このことはホームは、もしそこでの活動がそれ自身の存在意義を示すものでなくなれば、即座に「正当性を喪失」すべく運命づけられた不安定な存在であることを示しているからである。

こうした不安定性は、ホーム活動に日々たずさわる内部の人間にとって「厄介事」であり、また、それは絶えざる「問題」の源泉であり、じっさい、さまざまな論争を生み出してきた。だが、逆に言えば、この制度は、それ自身の制度としての正当性の欠如を補い、問題を解決する活動を、公式的にも非公式にもそれ自身の活動の一部として組み込み、それをエネルギーに変換するひとつの「仕掛け」と見ることもできる。こうして、ホーム制は、生徒も含め高校全体を「いかにして現状を改善するか」といった実践活動や「それ自身の意味」や「何が高校教育の目標か」といった反省活動に巻き込むことで、ホーム活動・学校活動の合理化・形式化への動きをある程度押しとどめてきたのである。

*

では、1994年3月、ホーム制がその活動を停止したことは何を示しているのか。以下、ホーム制廃止を巡る教師の意識（存続派と廃止派の主張）について検討していくが、ここでは存続派と廃止派のどちらの意見が「より正しい」かを判断することに関心があるのではない。ここでは、廃止派の主張と存続派の主張の論理構成や視点＝前提を浮き彫りにすることを通して、上で見たような活動＝運動（相互作用・対話的関係）が、いかにして阻害されてきたのか、その内的要因を探ることに視点を限定して、この問題を考えたい。

社会や生徒の変化により、ホーム制はもはやうまく成り立たず、現状は理念にほど遠い状態にある。達成不可能な「理想」にこだわるよりも、む

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

しろ現状に合わせてホーム制は廃止すべきである。これがホーム制の廃止を求める者の中心的な主張である。これに対しホーム制の存続を求める教師たちは、こうした現実にもかかわらず、あるいは、そうした現実があるからこそホーム制は存続すべきだ、と主張する。たとえば、彼らのロジックによれば、「生徒の自主性を育てるのが、ホーム制の意義」だとすれば、「自主性が欠如」し「人間関係が作れなくなっている今」こそホーム制が必要だということになる。

こうした二つの主張から、ホーム制の理念の意義、ホーム制の現状認識（うまく機能していないとする事実認識）の2点に関しては、両者がある程度共通の理解をもっていること、そして、にもかかわらず「結論」は正反対のものとなっていることがわかる。もちろん、この高校の教師の立場はこの二つしかないのではなく、さまざまな中間的な立場もあるが、ここでは、この両極の二つの立場に注目し、上でみた結論の違いがいかなるロジックのもとで生じてきたのかを探ることにする。

二つのロジックを比較してみると、そこには次の違いがあることがわかる。

まず第一は、教育や教師を観察する立場・スタンスの違いである。存続派は、理念に向かって現状を変えていくプロセスのなかにこそ教育の意義があり、教師はそうした目的に向かって最大限の努力を傾けるべきだと主張する。これに対し、廃止派は、生徒の現実の姿や教師の置かれた状況を冷静に受け止めることから出発すべきであり、現実的な志向をもった改革が必要であると説く。

廃止派が主張するように、存続派の論理は、教師をいかなる困難に面してもへこたれるべきでない「特別の存在（自己規律する超越的主体）」とみなすなど、過度に理想主義的であり、教師に過剰負担を強いるものである。これに対し廃止派のロジックでは「教師」に対する過度のロマンティシズムは排除されている。

だが、廃止派の論理には別の意味での「還元」が生じている。ここで興味深いのは、廃止派の論理のなかでは、「理想」と「現実」、「過去（の若者、の社会）」と「現在（の若者、社会）」などの二項対立的概念がしばしば用いられているという事実である。こうした概念は、相手を説得するための手段として用いられているのではあるが、こうした概念の使用、特に「理想」を「非現実的」なものと等値する行き方は、ホーム制の現状を「あたかもそこに具体的にかかわる人間とは無関係に生じた客観的帰結」として位置づけ、個々の人間の努力や抵抗の可能性をあらかじめ排除するものとなっている。

さらにこうしたロジックの違いが生まれるその背景を探っていくと、そこには、彼らの立つ制度的・意味的立場（ポジションやそれを語る言葉）に基づいて形成された教職観・秩序観・生徒観の違い、が見えてくる。

ホーム制の廃止を求める教師は、生徒の自由領域を保護するホームの壁があるため「学校全体でまとまれない」「問題を起こす生徒がいても責任はないというムードがでる」「もうひとつ深いところまで指導できない」など、さまざまな問題が生じていることを指摘する。こうした視点からするとホーム制の存続にこだわる教師は、「甘い」「非現実的」な考えを抱く楽観主義者に見える。

これに対しホーム制の存続を求める教師は、「厳しく統制しない行き方」のなかには「なくまで待とう主義」と「知らん顔主義」の二つがあり、たとえ生徒を即座に指導できないとしても、生徒が自ら変化するのを待つこと自体が教育的に重要なのだと主張する。

これをイデオロギーや教育観の違いとみるのは簡単だが、こうした信念を支える制度的土台にも目を向ける必要がある。存続派の教師たちがこうした「待つ姿勢」を維持できたのは、ホーム制が作り出す教師の位置（ポジション）のおかげであった。すなわち、初期においてホームは「家族」に他ならず、教師は「アドバイザー（親・兄・姉）」として自己を位置づけていた。そのため、彼らは生徒を「取り締まる」立場からではなく、むしろ「取り締まり」から守り、見守る者の立場から生徒に接することができた。これに対し、廃止派の教師たちは、「全体の統一や公平性」「生徒のきちんとした取り締まり」「深い指導」を全うすることを自己の責務と考える教育者あるいは学校職員の立場に立ち、だからこそ、統一性を欠く生徒の現状や、それを許すホーム制を憎むようになったのである。

考察

近代社会、特に官僚制組織は、「合理化」に向かう傾向を内在化している、とヴェーバー（1960）

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

は見る。何があっても情報を隠す学校、「横並び」の規範に縛られる教員を見ると、「合理化」どころかひたすら「形式化（儀礼主義・事なかれ主義）」に向かう学校の姿がみえてくる（永井,1977）。だが、自己の内部に矛盾を抱え、自己反省の運動を繰り返してきたホーム制での実践＝経験は、こうした傾向は果たして「必然・不可避」のものなのか考え直させるに十分な経験である。

これと同時に、ホーム制の経験は、われわれの無自覚の上に立っている前提・視点が経験の分節の仕方や、その後の実践＝現実の方向を規定していく様子にも目を向けさせてくれる。たとえば、ホーム制での経験は、本来「経験的」な出来事である「理想」と「現実」の分離という事態を実体化し、こうした区別＝枠組みをアプリオリな分析概念として無批判に現実の分析道具、特に理想主義の幻想性を暴く道具として使用することが、実際に教育現場における現実の「超現実化＝説呪術化」を促進させてきたのではないか、ということについて、わたしたちに注意を促しているように思われる。（越智康詞）

3．卒業生にとってのホームルーム制--「教育実践の効果」再考

問題関心--内面化仮説は妥当か？

本節では、卒業生インタビューに基づいて、生徒が卒業後の人生の中でホームでの経験をどのようなものとして意味づけているのかを明らかにし、高校における教育実践が生徒に及ぼす効果について考察する。同校のホームルーム制はほぼ半世紀にわたり続いた制度であるだけに、その活動内容は時期によって異なるが、概括するとホームの活動には、一部屋に集まって昼食をとること、その後にショートホームルームを持つこと、文化祭、スポーツ大会などの各種の学校行事への参加、およびキャンプなどのホームの活動等がある。また、生徒たちは教師の話や種々の印刷物などを通じて、ホームの意義が「異質なものに対する理解と寛容」であることを繰り返し聞かされてきた。多くの学年では生徒自身もホーム対抗のディベート大会を通じて、ホームルーム制は存続すべきか否かを論じ、その依って立つ理念を確認してもいる。このように若狭高校ではある教育理念が明示的に提示され、ホーム毎に各教科の授業以外の教育活動が豊富に提供されてきた。こうした特徴をもつ教育実践が生徒の卒業後の人生に対していかなる影響をもたらしたのだろうか。ここでは、新制高校設立時の卒業生からつい2、3年前の卒業した者までを含む42名を対象としたインタビュー調査に基づいて、この点を分析する。

ところで、これも第1節でも述べたように、高校教育の効果を卒業後の人生の中で確認しようという作業は、きわめて重要であるにもかかわらずほとんどなされてこなかった。それゆえ、この点に関する理論的な分析枠組そのものの構築がここでの1つの課題である。一般に学習や社会化に関する先行研究では、効果や影響については内面化仮説に立つものが多い。つまり、そこでの学習内容がその者の意識の中に内面化され、その後の行動や態度に影響を及ぼすという仮説である。たとえば、首藤（1995)は心理学の立場から、子ども達の「たくましい社会性」が彼らの生活する文化的な環境の中で学習され発達していくのだと述べているが、これはこうした見方に立っていると言える。また社会化論においても、これまで主流をなしてきたのは社会化過程を価値や規範の内面化ととらえる立場であった（加藤1995)。

卒業後の生活におよぼすホームルーム制の効果がこの仮説に則っているとすれば、効果が生じるのは、在学中にこの実践の意義が十分理解され、それが伝えようとする価値や態度が内面化された場合に限定されるだろう。だが、果たしてホームルーム制の教育効果はそうしたものなのだろうか。そこで、以下ではこの問いを出発点に、卒業生たちがホームルーム制をどう見ていたのかを、在学中と卒業後で比較する。その上で、卒業後に彼らがホームルーム制の意義を感じるのはどんな場面なのかを検討する。以上の分析に基づいて、ホームルーム制の教育効果とはどのようなもので、それはどのようにして生じるのかを明らかにしたい。

調査結果

まず最初の問いについてであるが、卒業生の多くは仮説に反して、在学中はホーム制のよさや意味はよく分からなかったが、卒業して初めてそれが分かるようになったと指摘した。たとえば、1970年代前半に卒業したAさん（理数科、女）は、高校時代にはホームルーム制はあまりいいものだ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

とは感じられなかったが、卒業してからはその意義を実感するようになったという。彼女が在学していたころは学生運動がまだ盛んなころで、彼女も一生懸命にいろいろなことを考えたり打ち込もうとしていた。しかし、そうした彼女にとって、ホームは異質な人々の集まりだったため、何事にも一丸となって事にあたることが難しいように感じていた。しかしそれでも、彼女は、現在の生活に対してホーム制の意義があるかとの問いに対し、やはり「異質の理解と寛容」ということが今でも影響を与えていると答えた。この他にも、多くの者が「今となってはいい経験になったと思う」と答えている。

卒業生が卒業後に実感するホームルーム制の意義は様々である。1つは、ホームが同窓生とのつながりを培う上で役立つという側面である。しかし、教育効果という観点からみた場合、重要なのは以下の2つの点だろう。1つは、他者とのつきあい方を学ぶということ、もう1つは積極的に異質な他者とつながりをもとうと動機づけられること、である。何人もの卒業生が、進学先の大学や職場で、意見や立場を異にする他者とのかかわりを求められた場面で、ホームの経験を思い起こし、その意義を痛感したと答えている。また、何人かの卒業生は、仕事などで集団を統括する立場に立った時にホームのことを思いだし、それを実践に生かそうとしていた。彼らは異質な者からなる集団の中で他者とかかわりあうことがいかに重要かを思い知り、ホームルーム制の経験を集団づくりに生かしていったのである。この他にも、親になって子どもをもち、子どもにどういう人間関係の中で育ってほしいかと考えた時にホームルーム制の意義がはじめて分かったという人もいた。

想起された時点で生じる教育実践の効果

以上から明らかなのは、卒業生は、卒業後の生活の中で出会う様々な場面で異質なものに対する理解と寛容というホームルーム制の理念とその理念に支えられた種々の実践を想い起こし、その意義を実感したということである。彼らのすべてが高校在学中からホームの意義を実感していたわけではない。つまり、ホームルーム制に関しては、内面化仮説では解きあかせない効果が存在するのである。それは、卒業後のある時点でホームの経験を想い起こした時に、はじめて生じる実践の効果である。ここではこれを「想起された時点で生じる教育実践の効果」と呼ぶことにしよう。

佐々木（1996)によれば、こうした想起は体験が二重化するときに生じるという。

つまり、過去の体験と同じ体験を再びしたときに、人は以前の体験を思い出すのである。卒業生がホームのことを思い出すのはまさにそのように体験が二重化したときであった。たとえば彼らがホームのことを思い出したのは、ホームと同様に、仕事などで異質な人々と出会った時である。ただし、これに加えて、我々は、卒業後に出会ったその場面がホームと同じ、あるいは似ていると認識する「目」を卒業生が持つことが重要なことも見出した。この「目」を獲得する上で重要な役割を果たしたのは、「異質なものに対する理解と寛容」という理念である。なぜなら、この理念により、卒業生たちはホームでの経験を具体個別のものから抽象的一般的なものへと昇華させることができたからである。換言すれば、この理念によって、彼らはホームの経験をあの先輩、あの後輩との交わりとしてではなく、「自分と異質な人」との出会いとして把握することができたのである。こうして彼らはホームの経験を卒業後の、高校時代とは全く立場や年齢の異なる他者との出会いの場面に関連づけることができた。

ここでの分析で我々が見出したのは、学校教育に内在する隠れた効果である。今回発見された、想起された時点で生じる教育実践の効果は、学校教育の新たな可能性を示している。さらにその知見は、学校教育のあり方を考える場合に、内面化仮説だけに依拠すべきではないこと、学校が教育活動を組織する上でそれを支える理念がきわめて重要であることも教えている。当日は、以上の内容を具体的なデータを紹介しながら報告する。

（酒井　朗）

＜注＞

1）異学年がミックスしているためにこう呼ばれた。また、「綜合異質編成ホームルーム」とも呼ばれることもあった。以下、ホーム制と略す場合もある。

2）本研究を実施するにあたり、若狭高校の教職員、ならびに卒業生の方々に多大なご協力を賜った。ここに記してお礼を申し上げます。

NII-Electronic Library Service